

## ナイチンゲール看護のこころ今に伝える ―看護・福祉思想と教育―

第 32 回学術集会会長基調講演

佐々木秀美

(広島文化学園大学看護学部・看護学研究科教授)

私は、日本看護歴史学会第 32 回学術集会会長を賜りました広島文化学園大学看護学部・看護学研究科教授の佐々木秀美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、最初に、この度の西日本の災害に対しまして日本看護歴史学会様から、過分な支援金を頂きました。本当にありがとうございました。本学は理事長を筆頭に“災害対策本部”を立ち上げ、災害における危機回避に陣頭指揮を執っておられ、災害発生後、2 週間の休講措置を取った後、学生の安否確認・被害状況確認等、細部にわたって情報収集と解決の為の重大な決定をしております。この支援金は、学生への災害支援対策費用の一部として大切にに使わせて頂きます。

そして、呉市長様におかれましては、呉市の災害問題で多くの困難を抱える中、本学会に参加していただき、温かいお言葉を賜りました。深く感謝申し上げます。災害の影響を大きく受けております広島県は呉市で本学会が開催されましたことで、交通網アクセスが非常に悪く、第 32 回学術集会にご参加していただきました会場の皆様に対してこころより感謝申し上げます。今回の集中豪雨ですが、7 月 6 日の午前 1:00～7 月 9 日午前 6:00 までの呉市の雨量は 498.5mm でした。7 月の雨量は 227mm (10 年間の平均) ですから、たった 4 日間で通常の 2 倍の雨が降ったことになります。この結果、河川の氾濫や土砂崩れが方々で起きました。結果、海路以外の交通遮断が起き、呉市は事実上、孤立した状態になりました。その為、食品・水・その他日常生活物資が不足しました。その土砂崩れは配水管をも破損させ、断水状態が続きました。断水の結果、各家庭では、清潔な水が確保できなくなり、食事の支度、清潔の確保、適切な排泄ができないという状況を招きました。加えて、NTT 西日本の電信柱の破損や倒壊で、ネット通信、設置電話や携帯電話などと言った通信網の遮断が起き、各個人の情報が取りにくい状況にありました。私たちは今回の災害で、ナイチンゲールが述べた健康維持に必要な不可欠なニーズという意味で真に多くを学びました。そして、多くの方々から励ましのお言葉や支援を頂きました。深く感謝申し上げます。そして、何よりも不自由な交通事情にも関わらず、本学会にご参加いただきましたこと、重ねまして御礼申し上げます。キャンパス周辺を見回しましても、海・山・川といった自然に恵まれた環境の中にあると認識できますが、それは自然災害と向き合っているとも言えるのです。自然災害の多いこの日本で生活する私たちは、この大自然を愛し、大自然に畏敬の念を抱くことには変わりありません。しかしながら、やはり、他方で大自然を恐れるという感情も併せてもっていかねばならないと思います。

さて、本題に入ります前に、私とフローレンス・ナイチンゲールとの出会いについて一言申し上げます。誤解のないように申しますが、私は今の時代を生きております関係で、ナイチンゲールとの出会いは勿論著作を通してです。私は、看護師としての教育を受けた後、二十数年の看護実践を誠実に実践してきたつもりです。煩雑に思いながらもなおかつ私自身が有する看護のあるべき姿を描きつつ、看護実践現場を改善しようと努力しておりました。その改善問題は、

ベットサイドにつるされておりました尿器の一元管理でした。どう、考えても、排泄物がすぐ近くにある環境で終日暮らせるのか、食事ができるのかという問いでした。この療養環境を改善したく思いましたが、スタッフ間での認識の相違がありました上に私の説得力も弱く、提言が空しく思えた時、私に大きな勇気を与えてくれた一冊の本が、ナイチンゲールの『看護覚え書』でした。その時、私は 80 年人生の丁度中間地点におりました。職業人生も含め、学びなおしを始めた契機ともなったのがその著作です。著作のタイトルに続いて「What it is and What it is not」と書かれたその著作は、日常生活と健康との関係と、病気からの回復への手助けを如何にすべきかの示唆を与えようとしたものでした。著作についてナイチンゲールは「看護の考え方の法則を述べて看護婦が自分で看護を学べるようにしようとしたものでは決してないし、看護師に看護することを教えるための手引書ではない。」と述べ、「これは人の健康について直接責任を負っている女性たちに、考え方のヒントを与えたいという目的で書いた。」と述べておりました。しかし、その内容は看護について責任を担うべき看護師が最も知るべきであり、よい看護を構成する真の要素について探求すべき事柄の多くを含んでおりました。「排泄物からの悪臭」はまさに私がベットサイドの環境問題に焦点を当てていた事柄と一致しておりました。1860 年にこの著作を書いたナイチンゲールという人物に対して驚嘆以外の感情は何も発せず衝撃を受けたという言い方も大げさではありません。実際の看護教育の中でも、その他での情報からも私の知り得るナイチンゲールは、「クリミアの天使」「看護教育の母」以外に何もなかったからです。“彼女について知りたい”と思う私の感情は、彼女の墓参りにイギリスを訪れるまでの強い感情に膨れ上がると同時に、私の背後にナイチンゲールがいるのではないかと、その力で突き動かされているのではないかと自身感じるほどでした。以降、その感覚は私の研究活動の根源になったと思います。現場での看護実践のさなか、私は、日本の看護は進歩したのか？後退したのか？100 年以上も前によい看護を構成する真の要素、即ち、健康の法則、即ち、看護の法則を発表したナイチンゲールについて改めて強い関心を持ったのはこの時からです。そして、私はまず、自身に教育・研究力をつけるべきだとの決意から、改めて教育学で学びを開始、ナイチンゲール研究を携えながら、「我が国の看護教育の歴史」に関する研究に着手、博士（教育学）の学位を取得し、本学に着任しました。

後年、『ナイチンゲール評伝』を書いたリットン・ストレイチーは、クリミアから帰還したナイチンゲールを見て母親が涙ぐみながら、「私たちは白鳥を生んだアヒルです。」と言ったという言葉に対して「白鳥だなんてとんでもない、彼女は鷲（Eagle）だ！」と文中で反論しています。ナイチンゲールの改革のすさまじさを表現した言葉として鷲（Eagle）としたのでしょうか。スライドでは、鷲と同種族であります鷹の写真をお示ししました（図 1）。

ナイチンゲール研究実施上、幸いにもナイチンゲールの著作は諸先輩方が翻訳され、その他、研究された論文も得ることが可能でした。その研究手法は、「我々は過去から受け継いだ遺産でしか未来を建設し得ない。」という社会学者デュルケム（Emile Durkheim 1858～1917）の『教育と社会学』からヒントを得ております。さらには、ナイチンゲールという人物の本質探求は、「人間が一つの目的に向かって行動するという事、その行動は目的を認識した上でのことであり、思考と行動が無関係ではない。」というプラグマティズム思想（Charles Sanders Pierce 1839－1914）からヒントを得ています。ゆえに、私のナイチンゲール研究の多くは、彼女が実際に行動（業績）として起こした事柄に焦点を当てて、彼女が何を認識（当時の社会的背景）し、何を考え、行動

として起こしたのかという論点からの検証・検討です。つまりは、温故知新の考え方です。さらに、研究を進めると彼女の改革の論点は、健康を主題としながら、地域福祉に視点を当てたとも考えました。そこで、本学会のテーマを“ナイチンゲール看護のこころ今に伝える”とさせて頂き、サブテーマに“看護・福祉思想と教育”とさせて頂いた次第でございます。

それでは、ナイチンゲールが観たイギリス社会はどうだったのでしょうか？彼女が観察したイギリス社会、それは、労働者階級と貧困そして病気、宗教的混乱の時代、科学主義の台頭、女性の人権問題と女性解放運動、公衆衛生の悪さと病院環境の粗悪さなどがあったと考えられました。観察の重要性を述べたナイチンゲールは、「観察は私たちに事実を告げる。思考は事実の意味を知らせ、思考は観察力と共に訓練を必要とする（看護婦の訓練と病人の看護）。」と述べています。

イギリスでは、15世紀初頭、ヘンリー8世がイギリス国教会を設立しましたが、教義を持たない宗派であったために宗教的退廃が著しく、その後プロテスタントに対抗するローマン・カソリック教会の改革運動、ローマン・カソリック教会の腐敗を痛烈に批判するルター派の出現、聖書中心、神の主権を強調するカルヴァン派、改革派、長老派などの出現、幼児洗礼を否定し、自らの意志による洗礼による信仰告白のみを洗礼の条件とするアナバプテスト派（Anabaptist）の出現、そして、人間の倫理的問題を強調し、キリストをその範とするヒューマニスト派の出現などがあり、当時のイギリスでは、宗教的混乱の時代であったとも言えるでしょう。そうした18世紀中庸、科学主義（scientism）が台頭してきます。その代表者として、チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin 1809-1882）が挙げられると思いますが、歴史的には、教育・哲学者としては、ジョン・ロック（John Locke 1632-1704）とデイヴィッド・ヒューム（David Hume 1711-1776）がイギリス経験論哲学、ジェレミ・ベンサム（Jeremy Bentham 1748-1832）が功利主義思想創始、ベンサム主義者として功利主義思想を推し進めるジェームズ・ミル（James Mill 1773-1836）、その息子ジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill 1806-1873）が19世紀は女性の世紀と述べて女性解放運動を展開、チャールズ・ダーウィンは『種の起源』に代表されるように生物進化論、その擁護者著として進化論哲学者のハーバート・スペンサー（Herbert Spencer 1820-1903）が社会ダーウィニズムの指導的役割を果たしていました。特にスペンサーは、その科学論の中で、「自然が健康のために有効な安全装置を与えてくれたのに、知識不足がこの安全装置の大半を無駄にしている。たくましい体力とそれに伴う元気とは幸福の最大の要素である。学校教育では、生理学の一般真理と、日常行為との関係を理解するに必要な生理学のコースこそ、教育の最も基礎的な部分である」と『進歩について—その法則と原因』で述べています。

幼児期からのナイチンゲールは、その成長過程においてキリスト教の影響を受け、早くから神秘主義的傾向を示していたようです。信仰こそが魂の真の目であり、耳である。真実の目は真理の探究につながると述べ、「真理の探究に関わる限り、それは、神秘主義と哲学における探究が、われわれの存在するものと意志と目的が人類に及ぼすことは明白である（思索への示唆）。」と述べています。しかし、19世紀中庸、ビクトリア朝科学主義に強く影響を受けるようになります。

他方で、ナイチンゲールは、知性を重んじた主知主義的傾向も強くなっていきます。彼女は、「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する（看護婦と見習い生への書簡）。」と述べています。これはナイチンゲール自身が、オーギュスト・コント（Isidore Auguste Marie François Xavier Comte 1798-1857）というフランスの社会学者の言葉

を引用したと述べています。知性という言葉は、今後、ナイチンゲールの重要なキーワードになっていきます。その後、宗教的概念を強く示しながら、「人類が自らの能力を働かせることによって無知から真理を求め、不完全から完全へと進んでいく（思索への示唆）。」と述べました。このナイチンゲールの問いが、身近な社会を観察して得た結果であろうと考えられます。自らの問いに答えを要求するがごとく、ナイチンゲールの生涯における闘いは始まります。まず、家族内での自立に向けた闘い（1840～1853年）、病院の看護監督者としてのその機構改善の為の闘い（1853～1854年）、クリミア戦争従軍中は兵士の健康回復と処遇改善のための軍医との闘い（1854～1856年）、クリミア戦争終結後、死亡した兵士の原因はイギリス陸軍省の怠慢にあるとして、陸軍の改善を求めた闘い（1856～1860年）、貧しい人々の処遇を改善するための救貧法委員会との闘い（1864～1867）、晩年のイギリス看護協会（看護師の国家登録制度問題）との闘い（1886～1893）は、結局、ナイチンゲールが手を引いた形になりましたが、結論的に申し上げますと、これらの闘いは、高邁な理想と精神を有するナイチンゲールの、それは人生における理想の追求のための闘いでした。

「なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。なぜ女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか？」という問いは、ナイチンゲールが父親に充てた手紙にありました（*Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters*）。そして「女性たちは家庭内の白色奴隷である。自己の生活も調整できないで、心霊的にも精神的にも貧弱な生き物になっているの。」や「神がわれわれ女性を“Dead Body（生ける屍）”にするためにお造りになったとは考えられない、神のなさる事は完璧であるはずだ（*Cassandra/Suggestions for Thought*）。」などの言葉は、女性の無知がもたらす生き方や、家庭内での位置付けの弱さや人間性の崩壊を示しています。「19世紀は女性の世紀」とは『カイゼルスウェルト学園によせて』というナイチンゲールの著作の冒頭の言葉です。女性を無知から解放し、心身の安寧（幸福）を計る（福祉）ための策として女性に教育を施すこと、これは彼女の生活設計の中に組み込まれます。

同時に、ナイチンゲールは病院環境にも言及します。「病院とは患者が多くはその健康を回復し、大概の場合、健康が増進して自分の家族達の元に帰る為の学習の場であるべきであるのに、そうではなく、病院の事情に通じている者の多くが知っている事であるが、不道德と下品さを助長させる場であるといわれているのを私たちは知っている。それは評判の良くない女性が看護師として受け入れられ」と述べたナイチンゲールの考える病院の機能、その機能を著しく害している粗悪な病院看護婦の一扫によって病院環境を改善するために、看護教育を開始し、新しく創出された専門職としての看護師による公衆衛生の改善を図ることが可能になります。

次に、クリミアでの経験からナイチンゲールが学んだこと、それは、生命維持に必要な不可欠な原則（清浄な空気と水の供給、適切な排水、生命維持に必要な栄養の補給、保温、清潔の保持等）は、平時の都会・田舎での暮らし同様、戦地、災害の場にあっても人々に平等に与えられなければならない。それは、「今回の災害から私たちが学んだことでもあります。戦争や自然災害は、生存の問題に関わり、それは人間の尊厳の問題でもあります。ゆえに、医療に携わる者は、この問題に真剣に取り組まなければなりませんし、国家は、国民の生命を守るために、その問題を解決する対策を講じる義務があるという事です。国民の健康を守るためのつらくて長い闘いの始まり

は陸軍の改革、看護教育の開始、貧しい人々の状況改善他につながりました。後に、ナイチンゲールは、「良い看護を構成する真の要素は健康の法則と生命の法則について理解することである（看護覚え書）。」と述べました。これはクリミアでの苦い体験から彼女自身が学んだことでありましょう。

貧しい労働者たちの実態については、エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』に細部にわたって記述されています。その一文をここに紹介します。「どちらを向いてもいたるところに我々は永続的あるいは一時的な貧困をこうした状態あるいは労働から派生する病気を、墮落を見出だす。いたるところに肉体と精神の両面に渡る人間性の破壊を、緩やかではあるが確実な人間性の喪失を見いだす。」

加えて、ナイチンゲールも「何の配慮もされておらず、貧しい労働者たちは過密状態で無理な姿勢、運動不足、短い食事時間と栄養不足、長時間に及ぶ過酷な労働と不潔な空気といった中で、安い賃金と引き明けに労働と健康と、そして生命を提供しなければならない（看護覚え書）。」と述べています。これらの貧しい労働者たちの状態を改善するには、医療に新しく草創した看護師という専門職者が彼らに健康教育をすることによって無知から解放し、自身で病気の回復と予防ができるようにすることにつながります。併せて、不潔な環境を改善するといった公衆衛生も改革も実施させようと企図したと考えます。「いったい、何のために、他人の目、他人の勝手な期待、他人の意見などに悩まされる必要があるのでしょうか。自分のやりたいことをやらないで他人から言われたままに生きた人で、優れたこと、有用なことを成し遂げた人は、いまだかつて誰もいない（Note on Nursing）。」、「なぜ、女性は知性、倫理的行動、情熱という3つの徳を兼ね備えているながら、社会においてその3つのうちどの一つもいかせられるような場所を見つけられないのか？（Cassandra/Suggestions for Thought,）」と言う問いは、「善いものをどこまでも追求し、大きな目的に一心不乱に従事し、優れた理想と高邁な感情に対して共感する気品ある計画の中で生きられるものである。」との結論を、彼女自身の知性の働きによって導き出していきます。それは、ナイチンゲール自身の人生における理想的なライフサイクルの追求でもありました。自身の体験からナイチンゲールは、女性を精神的・経済的・社会的自立させ、社会的に価値ある存在にすることを強く求めるようになります。その結果、ナイチンゲールの改革は、強く社会に評価され、伝統的な女性の美德を覆すことになりました。ゆえに、彼女は、当時の“女性の権利”問題の活動家たちがなし得なかった女性を社会に解放することになり、実践的女性解放主義者とも呼ばれる所以であります。

医療における良質な看護専門職の草創したナイチンゲールは、「優れた看護婦は優れた女性」

優れた女性は「その知性 (intellect)、倫理 (moral activity)、実践 (practice) において最上のものを患者に惜しみなく与える女性である。」と述べました。そして、彼女は「女性を看護婦として訓練する教育において、その教育の主眼とするところは人格の問題であり、それは単に技術的な教育を施せば良いと言うものではありません。」と述べ、「看護とは単に Art (技術) であるのみならず Character (人格) でもある (Nursing is not only an art but a character).」と述べています。看護が人格であるという事、その意味を私たちは深く探求しなければなりません。そして看護師は看護に対する3つの関心を持つべきだとして、「看護師が持つべき関心の一つは症例に対する理性的な関心、二つ目は病人に対する心のこもった関心、3つ目は病人の世話と治療についての技術的

な関心である（看護婦の訓練と病人の看護）。」であると述べました。この言葉は、先の看護の本質につながる発言との一致性と同時に、次の「人間の道徳的、知的、精神的能力の調和的発達が真なる概念を与える。」という言葉との一致性も見出します（思索への示唆）。その調和的発達の為にこそ、訓練（Discipline）があります。「Discipline（訓育、訓練、規律）こそが Training（訓練）の本質である（看護婦の訓練と病人の看護）」と述べたナイチンゲールは、「訓練とは何が成されねばならないかだけでなく、どの様に成すべきかも教える事であり、訓練とは既にあなた方の中にある財産を、活用できるようにすること、既にあなた方が自分で知っていることを引き出すこと、学びとったものを貯え、それを自分の頭と眼と手とで実践に移し、必要な時にはいつでもそれを活用できるようにし、その頭と眼と手とが、いつでも自分のすぐに役立つ召使いになるようにしておくことである」とも述べています。観察から実践するというケアの在り方は、私たちの頭（Head）と手（Hand）が心（Heart）、即ち、3Hとして佐々木がいつも学生に伝えている言葉です。それはナイチンゲールの言う「人間の道徳的、知的、精神的能力の調和的発達」という言葉、そのものであり、彼女の看護に対するひたむきな思いはいつも一貫していると感じられるところです。ナイチンゲールの述べる「優れた看護師は、知性（intellect）、倫理（moral activity）、実践（practice）において最上のものを患者に惜しみなく与える。」という言葉は、学校教育法第52条（大学の教育目的）の「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させるという目的と一致しています。この一致性を、もっと早く発見したならば、何の矛盾もなく看護学は、もっと早く高等教育に転換することが可能だったかもしれないと私は考えるのです。

看護は実践の科学と言われます。ナイチンゲールは、「理論というものは実践に支えられている限りは大いに有効なものであるが、実践の伴わない理論は看護婦に破滅をもたらす。」とも述べています。飛躍するかもしれませんが、本学の建立の精神は、“Theoria cum Praxi” 「究理実践」です。この言葉は、ドイツの思想家ゴットフリート・ライプニッツ（1646～1716）によるものです。私たちは、この言葉を理論と実践（Theory and Practice）の一致と解釈しています。

2016年度末にドイツに行ってまいりました。ナイチンゲールが初期に学んだと言われるカイザルスヴェルト学園を訪問することが目的です。彼女が微細に観察し、記録した同学園の記録『カイゼルスヴェルト学園によせて』から、ナイチンゲールの原点とドイツの風土、価値についての探求と単純にその空気に触れてみたいと考えたからです。この後の教育講演でお話をされる先生方に後はお任せしてここでは、お写真だけ、皆様にお見せします。

最後に、彼女の行った改革は、健康と幸福、地域における看護活動の有益性についてであります。つまり、絶え間ない有益な活動の状態こそが、この地上で許される最上の幸福な状態であるとしたら、それは個人が健康である必要があります。人々が有益な活動ができるよう健康問題改善に向けた方策を考えて実行する看護専門職者の活動は地域福祉（幸福）につながるという事になります。地域の人々が健康であるという事、即ち、個の健康こそが地域社会の健康を示しているという事であり、個体の健康なくして地域社会の健康はあり得ないという事になります。従って、看護と福祉は自ずと地域の人々に関わるがゆえに生存権や個人の尊厳などといった人権思想を根源とします。

ナイチンゲールが示した模範的行動から、私たちが学ぶことは、真実の目を持ち、正しい現状

認識から、良心に基づいた正しい解決策を導き、これを正しく実行するべきことであるという事です。女性の専門職の創設は、病院看護の質の向上、そこには公衆衛生の普及と国民の体力向上を目指した健康教育を実践することが地域社会に貢献したことになり、それが女性の有用性を認識させ、女性の社会的価値を高めることにつながったという事であり、ナイチンゲールの看護教育目的は“人権思想”に基づいた女性の人格と国民の健康を主眼としたものであるがゆえに今回の私の基調講演の最初のタイトルに戻りますと、ナイチンゲールの“看護・福祉思想と教育“というテーマに帰結してくると思います。国民の健康維持のための取り組みは、健康と幸福との関連において人々の社会権（自然権）、人道主義思想に根づいた極めて実践的・行動主義的思想であり、かつ、極めて“自然の法則”に添った考えから、社会悪を改善した偉大な改革者・科学者でした。ゆえに、ナイチンゲールが「明確な目的は実現していかなければならないが、その目的を実現していくための道は、大いに発見していかななくてはならない。」とも述べたようにあらゆる視点から看護の本質探求を行い、道は一つではないと考え、状況に応じた解決策を導き出していくべきであるとの結論に至ったわけでございます。

最後に、最初にお見せしました鷹の写真を再掲します。鷹の象徴は変革と成長（図2）、つまりは、私が今に伝えないナイチンゲールの看護のこころは、ナイチンゲールが示した模範的行動から、私たちが学ぶことは、真実の目を持ち、正しい現状認識から、良心に基づいた正しい解決策を導き、これを正しく実行するべきであること。これが温故知新としての歴史的な研究に課せられる課題であり、これが看護界と看護学に求められる将来ビジョンであると考えます。

さて、ここまでで私は、ナイチンゲールの業績を中心に彼女の観たイギリス社会とその認識、そして彼女の経験から彼女の思想を探求しようと試みました。「人は誰でも寄る辺なく野に辛酸をなめながらひとりさまようことがある。」というカサンドラでの一文もそうでしょう。知るほどに人間としての心の痛みが伝わってきます。新しきことを提唱する者の苦痛は誰にも理解されないでしょう。私は、日本の看護の未来構築のために、ナイチンゲールの残した業績と共に、彼女が痛みを感じながら、一生を通して行った改革についてお伝えしました。彼女が私たちに伝えたかったその心に幾分か触れることにつながったでしょうか？最後にもう一度、鷹の写真を掲載します。鷹の象徴は変革と成長、私に与えられた時間の許す限り、その概略を伝えて参りましたが、看護の歴史探求に興味を持たれている方々の次の論点に新しい示唆が得られたら幸いです。ご清聴ありがとうございました。

(図 1)



(図 2)



(図 3)



「新原市長へ会場で寄せられた寄付金 ¥145,000 を贈呈しました。」